

『計量国語学』アーカイブ

ID	KK300102
種別	調査報告
タイトル	書名の言語学—国立国会図書館サーチに基づいて—
Title	Linguistics on Book Titles: Based on <i>National Diet Library Search</i>
著者	山中 信彦, 毛 愛濤
Author	YAMANAKA Nobuhiko, MAO Aitao
掲載号	30巻1号
発行日	2015年6月20日
開始ページ	14
終了ページ	31
著作権者	計量国語学会

調査報告

書名の言語学

—国立国会図書館サーチに基づいて—

山中 信彦 (埼玉大学)

毛 愛濤 (早稲田塾)

要旨

日本語の書名を対象に国会図書館サーチを用いて一般書とベストセラーのデータを集め分析した。前者については日本十進分類法に基づいて 8 分野を選び、2003 年～2012 年のデータから計 2082 冊の標本を抽出した。後者については 1973 年～1982 年及び 2003 年～2012 年の計 400 冊の情報を得た。分析の対象と方法は両者に共通で、書名をメインタイトルとサブタイトルに分け、字種の使用度数、書名の言語構造、モダリティを調べ、一般書については分野による、ベストセラーについては年代による違いを考察した。まず一般書について、メインタイトル、サブタイトルとも、全長、字種の比率、言語構造とモダリティの分布に分野差がある。次にベストセラーについて、メインタイトルの全長とモダリティの分布、及びサブタイトルの字種の比率に年代差がある。最後に「わかる」を例として書名に個別表現を用いる意図が分野によって異なることを考察した。

キーワード：本の題名、ネーミング、ベストセラー、メインタイトル、サブタイトル、字種、言語構造、モダリティ、分散分析、カイ 2 乗検定

1. はじめに

人であれ物であれ世の中に新しく現れた存在をどのように呼ぶかということは社会的に重要であるだけではなく言語学的に興味深い問題でもある。そのような「命名」のテーマに関しては日本語学でも実際これまでかなりの研究が行われてきている（概説書として森岡・山口（1985）、窪蘭（2008）など）。ただし、その主な対象は人名や社名や一般商品名などであり、書名つまり本の題名については豊富なデータがあるにもかかわらず言語学的に分析したものは意外に少ない。森岡・山口（1985: 100）は二、三の書名を「句による名前」の例として挙げているのみであり、窪蘭（2008）は頭韻の観点からかなり多くの例を分析しているものの日本語の書名に限って言えば「複合語の短縮」の例として二、三を挙げているにすぎない（同書: 146）。

一方佐々木（2001）は、芸術作品とりわけ絵画のタイトルについて哲学的に論じているが、文学作品についてもかなりの紙幅を割き、第 11 章「タイトルのレトリック」において、提喻型のタイトル、メタファー型のタイトル、メッセージ型のタイトルなどに分類して考察している。ただし取り上げた例は西洋のものが中心で日本語のものはやはり数例に

とどまる。なお同書は、本稿にとって重要なことであるが、芸術作品のタイトルは作品についての作者の思想を表現する一方で商品としての名づけ（ネーミング）という性格を持つと指摘している。

以上の先行研究に共通しているのは、少数の書名の例を挙げて限られた観点から分類・記述を行っていることである。もっと多くのデータに基づいて色々な観点から一般的な傾向を見出そうとする研究が必要だと考えられるが、日本語の書名に関しては管見の限り本格的な調査は行われていない。その点中国語の書名についてはいくつか調査がある。趙（2010）は、「北京開卷図書市場研究所の全国ベストセラーランキング」から、児童書以外のベストセラー105冊を対象に、書名の字数、言語構造、書名全体としての品詞的機能（名詞的性質か述語的性質か）、語彙の特徴の四つの面から分析した。牟（2010）は、当当网（中国の通販サイトのHP名）に掲載されているベストセラー400冊を対象に、字数、用語、言語構造、レトリックの四つの面から分析した。孫（2011）は、当当网に掲載されているベストセラー500冊を対象に、字数、レトリック、語気（モダリティ）の三つの面から分析した。

以上の調査をまとめると、いずれもベストセラーを対象とし、書名の字数、言語構造、品詞、語彙、レトリック、モダリティなどについて考察している。本研究は、日本語の書名に関してまとまった調査がない現状に鑑み、調査項目に関してはこれらの調査をほぼ踏襲した。ただし、日本語と中国語は統語構造や表記体系が大きく異なるので調査結果を比較することは試みない。調査対象に関してはベストセラーだけではなくそれ以外の本（以下「一般書」と呼ぶ）も取り上げた。内容から見て本がどのような分野に属するのかによって題名のつけ方に違った傾向がないかどうかを調べるのがその目的である（その点ベストセラーは内容的に文芸書や実用書に偏りがちだと思われる）。またベストセラーに関して、上述の調査は現在という一時期だけを対象としているが、年月が経過するにつれて書名のつけ方が変わってくることも考えられるため、本研究では現在と30年前の二つの時期のデータを比較する。さらにデータの分析方法に関しても、量的な分析としては中国語の文献が百分率を用いたものにとどまるのに対し、本研究では統計的有意差の検定を行う。

2. 調査方法

2.1 データ収集

一般書については、まず日本十進分類法に基づいて文系（人文・社会）から4分野、理系（自然・工学）から4分野を選んだ。その際、一般人にとって比較的馴染み深く、しかも日本十進分類法の第3次区分表（分類記号を3桁まで細分した表）の分類記号の最後の数字が「1」であるような8分野を選出した（後出の表1を参照）。その理由は、「**1」がそれらを直接包含する分野全体の基礎的または一般的なものを代表しており、それらを選ぶことによってあまり特殊なものに偏らないですむと考えたためである。それらは、「音楽の一般理論、音楽学」、「文学理論・作法」、「法学」、「経済学、経済思想」（以上、文系）、「基礎医学」、「一般動物学」、「理論物理学」、「工業基礎学」（以上、理系）である。以下、「音楽、文学、法学、経済、医学、動物、物理、工業」と略記する。

データの収集は2013年8月～9月に行った。国立国会図書館サーチの詳細検索で「分類記号」の欄に上述の分野の分類記号を入れ、「出版年」の欄に「2003年～2012年」と入

力し、「資料種別」の欄に「本」だけを指定してから検索した。検索結果一覧のデータは「古い順」で表示させた。ヒットしたデータの数には 8 分野間で大きい差があったが、標本数の差をなるべく小さくするため、データが 3000 以上の分野からは 10 分の 1 の標本を取り、1000 未満の分野からは 3 分の 1 の標本を取った。系統抽出法により最初の標本をランダムに選び、一定間隔で標本を抽出した。データには英文のタイトルが多数含まれていたが、本研究の対象としないため、これらは標本を抽出した後に省いた（ただし、和文タイトルの英訳として出ている場合は分析の対象とした）。表 1 に各分野の書名総数及び標本数を示す（分野欄にある括弧内の数字は日本十進分類法の分類記号である）¹。

表 1: 各分野の書名総数及び標本数
(書名総数の多い順)

分野	書名総数	標本数
医学 (491)	4554	447
工業 (501)	3883	382
経済 (331)	3533	270
法学 (321)	916	245
動物 (481)	683	223
音楽 (761)	581	189
物理 (421)	543	174
文学 (901)	470	152

ベストセラーについては、『出版年鑑』に基づいて 1973 年から 1982 年及び 2003 年から 2012 年の各年 20 冊、計 400 冊の情報を収集し、国立国会図書館サーチで検索し直して正確な情報を得た。なお、『出版年鑑』ではベストセラーは各年ごとに 20 位までしか掲載されていないので発売部数の違いは考慮せずにすべてをデータとした。また、400 冊のデータの中には、同じ本が複数年にわたってベストセラーになっている場合や、1 年間のベストセラー 20 冊の中に同じ本の異なる分冊あるいは同じ本の単行本と文庫本が別々にランキングされている場合が含まれる。本研究ではこのような重複を排除しなかった。それは、ベストセラーの異なり数に年代差があるかというような問題を

を考察の対象にしているのではないからである。

2.2 調査項目

分析の対象と方法は一般書とベストセラーに共通で、まず書名をメインタイトルとサブタイトルに分ける。国立国会図書館サーチに基づくデータにはそれらの境界に関する一義的な情報がないため、原則として、書名の最初のコロン（:）を境界に、前半をメインタイトル、後半をサブタイトルとする（例:『ともだちわーく: リトミック・ソルフェージュ: レスナー用 1』）。原則の中には次の場合も含まれる。即ち、コロン（:）がなく、前半部分の日本語と後半部分の英語が等号（=）でつながれ、前半と後半がほぼ同じ意味を表す書名も全部メインタイトルと見なす（例:『法を学ぶパートナー = An Introductory Guide to Studying Law』）。以上の原則にもかかわらず、コロンがなくても、巻号、発行年などが途中に入っている場合は、それらをメインタイトルとサブタイトルの境界と見なす（例:『法の理論 31（特集〈公共性と法〉）』）²。

1 本調査の後にデータが更新されたためであろうが、2014 年 7 月 7 日の時点においては表 1 と比べて書名総数に +51 から -3 までの増減がある。

2 一般書において「シリーズ」またはその類義語「叢書（双書）、文庫、ライブラリー、全集、など」を書名に含むものが計 13 冊あるが、その全てがメインタイトルの中に含むものである。「シリーズ」などの明示的な表現を含まないが実質的にはシリーズであるようなものがどれほどあるかは不明だが、いずれにせよメインタイトルとサブタイトルの分離に関しては以上に述べた手続きに従って処理した。

以上のように区分したメインタイトルとサブタイトルのそれぞれについて字種の使用度数、書名の言語構造、モダリティを調べ、一般書については分野による、ベストセラーについては年代による違いを考察する（以下、「メインタイトル又はサブタイトル」の意味で単に「タイトル」と言うことがある）。

調査項目のそれぞれに関して詳しく述べる。まず字種は、漢字、ひらがな、カタカナ、アルファベット、数字、記号の 6 種類に分け、文字を数えるにあたっては一つの文字コードに対応するものを 1 文字とみなす³。なお、タイトルの前半部分の日本語と後半部分の英語の間の等号（=）は数えず、またタイトルの後ろにある巻、号、年などの表示は、書名の本質的な部分とみなせる場合がほとんどないため、原則として数えない。

言語構造は表 2 のように分類した。

表 2: 言語構造の分類

分類番号	分類	例
10	名詞その他	一冊でわかる楽典；夫と妻のための老年学
11	名詞単独	動物進化形態学；開放区
12	名詞の名詞	小説の自由；市民法学の可能性
13	名詞と名詞	応用音楽学と民族音楽学；差別と日本人
14	名詞 + 格助詞など	現代数理物理学の観点から；夕暮まで
30	述語その他	アサリは海をきれいにするの？
31	動詞	病気がみえる；前例がないからやってみよう
32	形容詞	東大合格生のノートはかならず美しい
33	～は / が / も 名詞（だ）	君も今日から作曲家；毎日が日曜日
34	「～て」形	現代社会の論理を超えて；くじけないで
35	連用形	翔ぶが如く
36	述語 + 格助詞など	アイデアが形になるまで；ひどい目にあわないために
7	英語的表現を含む	17 才の日記 in 1945；ダイニング・アイ
0	全体その他	いのちってスゴイ！赤ちゃんの誕生

分類番号が 2 桁の数字になっているものは、下 2 桁目の数字が比較的性質の近い項目をまとめたグループであることを表す。数字そのものは便宜的につけたものであり深い意味はない。なお、表 2 において名詞類については 11～13 の下位カテゴリーがあるのに対し、動詞や形容詞などについては下位カテゴリーがないが、その理由は次の通りである。名詞類の場合、後述するように標本数が非常に多く、下位カテゴリーを設けても統計的検定に支障があまりないであろうという見通しがあった。また、11～13 のような簡潔な名詞句は示唆的で、これらを別に数えることによって興味深い結果が得られるのではないかという期待もあった（後述するように、このことは法学という分野の書名の性格を論じる際に

3 作業の手順をより具体的に言うと、書名データをコピーして *Excel* に張り付けたものを人手で数えて数値を入力した後、それら全てを *SPSS* のフォーマットに変換し印刷したうえで文字を数え直して数値の正しさをチェックした。

実現した)。それに対し動詞や形容詞などの場合、標本数が少ないため下位カテゴリーを設けても無益だと判断した（後述するように、このことは動詞や形容詞などを「述語類」という上位カテゴリーにまとめる必要があったという事実によって裏書きされる）。

構造を分類するに際しては主にタイトルの最後の語の品詞に注目するが、助動詞や終助詞などは省いて考える。「名詞」は複合名詞も含み、「形容詞」は形容動詞も含む。「～て」形は「～と」形や「～たら」形も代表するものとする。「名詞その他」とは、全体として名詞句に相当する例から簡潔なもの（分類番号 11～13）を独立させた残りである。同様に「述語その他」とは、全体として述語句に相当する例から分類番号 31～33 を独立させた残りである。その大部分は「～のだ」文型である。「全体その他」の典型例はタイトルが更に複数の対等の部分からなり構造を一つに特定しがたい場合である。

モダリティは表 3 のように分類した⁴。

表 3: モダリティの分類

分類番号	分類	例
1	陳述	現代経済学を学ぶ
2	疑問	電気は誰がつくるのか
3	勧誘	動物になって動いてみよう
4	訴え・強調	誰でもぜったい楽譜が読める！
5	命令・指示	エネルギー問題に立ち向かえ
0	その他	ロマンの原点を求めて

本稿で言う「モダリティ」は、「文が表現・伝達機能の観点から見てどのような性格を有するかを表す形式」（益岡ほか（1997）の「表現類型のモダリティ」）のことである（これは仁田（1991）の「発話・伝達のモダリティ」に相当する）⁵。ただし、本稿はそれらの文献とは分類のしかたがやや異なる。まず、統計的検定を行う上で必要とされる標本数を確保するため、ここではモダリティを通常より広めに認定する。つまり、表 2 の分類番

4 孫（2011）は、書名の中に適切に語気（以下「モダリティ」に置き換える）を使うことで、作者の思想や感情を表す助けにすることができ、予想外の影響力を及ぼすことができると述べている。特に＜疑問＞のモダリティについては、書名が質問することによって読者に注意を喚起し、本の中で答えを見つけるように誘導している。ある意味では、『マルクスはなぜ正しいのか』など書名に＜疑問＞のモダリティを含む本がベストセラーになったのは、書名に見られる鋭く斬新な＜疑問＞のモダリティと密接な関係があると言える、と論じている。日本語の書名についても類似した現象が見られないか、という関心からモダリティの調査を行った。なお、「書名が質問することによって読者に注意を喚起し、本の中で答えを見つけるように誘導している」という部分に関しては 3.2 節で後述する「なぜ」の分析にほぼそのまま当てはまる。

5 仁田（1991: 18 以下）によれば、モダリティは大きく＜言表事態めあてのモダリティ＞と＜発話・伝達のモダリティ＞の二種に分かれ（前者はいわゆる対事的モダリティに、後者はいわゆる対人的モダリティにあたる）、文の層状構造において＜発話・伝達のモダリティ＞が＜言表事態めあてのモダリティ＞を包み込む形で存在している。本稿の表 2 で挙げた『毎日が日曜日』を例にとると、＜言表事態めあてのモダリティ＞の下位分類である＜判断＞に属する＜断定＞を＜発話・伝達のモダリティ＞の下位分類である＜陳述＞が包み込んでいると考えられる。本研究では＜言表事態めあてのモダリティ＞の下位分類である＜待ち望み＞と＜判断＞や、それらのさらに細かい分類について論じるわけではないため、＜発話・伝達のモダリティ＞に調査を限定した。

号 30～36 の全てについて何らかのモダリティ（通常はそれに包含されていない「言いさし表現」などを含む）を認め⁶、それ以外の構造でも「訴え・強調」は可能とする。また、体系性よりも標本数を重視して分類し、数の少ない「感嘆」は「その他」に含めた。また、なるべく形式的な指標によって分類した。したがって、「陳述」は意志表現なども含むものとし⁷、「訴え・強調」は「！」が付いた表現のうち「疑問」「勧誘」「命令・指示」に該当する例を除いたものとする（「疑問」「勧誘」「命令・指示」は「訴え・強調」と比べてさらに有標であると考えられるからである）。なお、「その他」は言いさし表現が大部分を占める⁸。

3. 調査結果と考察

本節では、まず当初予定していた上述の調査項目の集計結果について重点的に検討し、最後に調査の過程で着目したネーミングにかかわる個別表現について考察する。

3.1 字種、言語構造、モダリティ

統計的に意味のある結果（有意水準 5%）のうち主なものを挙げ、論述の趣旨に添う実例を適宜示しながら可能な範囲で結果の解釈（つまり、それらの原因の考察）を試みる。

3.1.1 一般書の場合

各分野におけるメインタイトルの各字種の平均値（各分野における字種ごとの合計をその分野の標本数で割った値）及び標準偏差を表 4 に示す（括弧内は標準偏差、 n は標本数である。表 5、表 12、表 13 についても同様）。

6 白川（2009）は、「～ケド、～カラ、～タラ、～レバ、～シ、～テ形」などの従属節のみで終結した文を「言いさし文」と呼び、これらは談話レベルにおいては対人的なモダリティ形式を伴った独立文との平行性がみられる場合があるとする。例えば、「あ、あのその節はお騒がせしまして……」は、陳謝を意図して発話されたものであることは即時に理解できるだろう、と述べる（同書：149）。書名に含まれる表現は談話レベルのモダリティを担うとは言い難いが、本稿では形式の共通性に基づいて「言いさし表現」を考察の対象に含めた。

7 「～たい」などの希望表現は、一般書とベストセラーを合わせて 4 例と数が少なく、また話者自身の欲求に関する陳述に近いと考えられるので、「陳述」に含めた。

8 サブタイトルにおいては『最高の知識を得るために』のような「動詞終止形+ために」という形式が全部で 6 例（一般書 5 例、ベストセラー 1 例）あったが、「～て」形による言いさし表現の延長線上にあると考え、「その他」に入れた。また、一般書のサブタイトルにおいて『計測機器のデモ紹介付き』『全調に対応』のように本の内容や用途を補足説明するようなものが 14 例あったが、陳述する働きが弱いと考えられるので、やはり「その他」に入れた。

表 4: 各分野における各字種の平均値及び標準偏差 (メインタイトル)

字種 分野	漢字	ひらがな	カタカナ	アルファ ベット	数字	記号	全長	<i>n</i>
音楽	4.04 (2.81)	3.28 (3.23)	4.19 (4.36)	0.67 (3.11)	0.21 (0.78)	0.41 (0.78)	12.80 (6.02)	189
文学	3.94 (2.45)	2.36 (2.92)	3.28 (3.89)	0.52 (3.98)	0.12 (0.74)	0.32 (0.72)	10.52 (8.23)	152
法学	4.99 (2.85)	1.40 (1.81)	1.51 (2.98)	0.13 (2.04)	0.04 (0.43)	0.17 (0.53)	8.23 (4.71)	245
経済	6.59 (3.82)	1.77 (2.39)	2.08 (3.37)	0.33 (1.87)	0.14 (0.67)	0.27 (0.74)	11.18 (5.86)	270
医学	5.62 (4.07)	3.04 (3.35)	2.47 (3.51)	0.71 (5.12)	0.10 (0.56)	0.36 (0.82)	12.30 (8.25)	447
動物	4.59 (3.29)	3.73 (3.43)	1.25 (2.34)	0.88 (5.45)	0.08 (0.40)	0.27 (0.64)	10.80 (7.04)	223
物理	5.79 (2.57)	2.39 (2.72)	1.62 (3.00)	0.11 (0.78)	0.04 (0.29)	0.18 (0.54)	10.14 (4.55)	174
工業	7.56 (6.79)	2.22 (2.84)	4.94 (4.68)	1.54 (6.18)	0.31 (1.30)	0.47 (1.11)	17.05 (12.12)	382
分野 平均	5.67 (4.37)	2.52 (2.99)	2.77 (3.87)	0.70 (4.36)	0.14 (0.76)	0.32 (0.80)	12.12 (8.41)	2082

アルファベット, 数字, 記号は数値が小さいのでまとめて「ア数記」とし, 8 分野を被験者間要因, 4 字種を被験者内要因とする分散分析を行った (具体的には *IBM SPSS Statistics Version 19* を用い, 「一般線型モデル」の「反復測定」を選んで実行した). 分野の主効果は $F(7,2074)=33.00, p<.001$, 字種の主効果は $F(2.84,5886.17)=395.09, p<.001$, 字種と分野の交互作用は $F(19.87, 5886.17)=14.56, p<.001$ で, いずれも有意である.

4 字種を平均した場合の (全長に比例する) 分野別の長さについては次の序列がある:

工業 > 音楽 $\geq$ 医学 $\div$ 経済 $\div$ 動物 $\div$ 文学 $\geq$ 物理 $\geq$ 法学 (ただし, 文学 $\times$ 法学)⁹

工業が突出して長い理由としては, 標本の中に報告書が占める割合が約 7 分の 1 と他分野に比べて有意に多いことが考えられる¹⁰. 報告書の題名は概して長いからである.

9 「 $x > y$ 」は x が y より有意に大きいことを, 「 $x \div y$ 」は x と y の間に有意差がないことを, 「 $w \geq x \geq y \geq z$ 」は w と x , x と y , y と z の間に有意差がないが, w は y や z より, x は z より有意に大きいことを表す. 上記の符号で表しきれない場合は, 式の後ろに説明を置く. 「工業」, 「経済」などはそれぞれのカテゴリーの字数の平均値を表す.

10 報告書は典型的な本とは言い難いから, それを除外して統計処理をしたほうが本来の目的にかなったであろう, という議論をすることは可能である. 今回そうしなかったことについてはいくつかの理由がある. まず, 問題なのは報告書だけではなく, 法学の標本には (「本」だけを指定して検索したにもかかわらず) 定期刊行物とおぼしきものが, 経済の標本には産業連関表や県民/市民経済計算の類が, それぞれ約 6 分の 1 と約 9 分の 1 の割合を占める. 標本を典型的な本に統一するという立場からは, これらも除外すべきだということになろう. このことに関連してさらに, 各種の「典型的でない本」が占める割合が特

8 分野を平均した場合の字種別の長さについては次の序列がある：

漢字>カタカナ≡ひらがな>ア数記

字種と分野の交互作用が有意であったため、字種の各水準における分野の単純主効果と分野の各水準における字種の単純主効果の検定を行った。上述した全体の傾向と比べてかなり違う結果になった場合、当該の水準において特定の分野または特定の字種が多いあるいは少ないと言うことができるだろう。前者に関しては、漢字の序列は物理と法学がそれぞれ 3 位と 5 位で他分野と比べ大きい割合で、音楽が 7 位と小さい割合で使われている。ひらがなは動物と物理がそれぞれ 1 位、4 位と多いが、工業は 6 位と少ない。カタカナは文学が 3 位と多い。後者に関しては、音楽では漢字とひらがなとカタカナに有意差がない。音楽では専門用語や音階などが『ダイアトニック・コードのすべて』『基本はドレミファソラシド』のようにほとんどカタカナになっていること、子供向けの本などで『おやこのおんがくえほんドレミでうたお!』のように漢字の代わりにひらがなが使われていることが多いことがその原因と考えられる。また、動物では漢字とひらがなに有意差がないがそのいずれよりもカタカナは有意に少ない。子供向けの本が多いためであろうが、『どうぶつのきもち』『もっと!ほんのおおきさ水族館』のようにひらがなを多用する結果、柔らかなイメージの表現になっている。

各分野におけるサブタイトルの各字種の平均値及び標準偏差を表 5 に示す。

サブタイトルについては分野の主効果は $F(7,959)=3.43, p<.01$ 、字種の主効果は $F(2.83,2714.31)=212.29, p<.001$ 、字種と分野の交互作用は $F(19.81, 2714.31)=7.33, p<.001$ で、いずれも有意である。

4 字種を平均した場合の分野別の長さについては次の序列がある：

音楽≡工業≧医学≡動物≡経済≡物理≡法学≧文学

8 分野を平均した場合の字種別の長さについては次の序列がある：

漢字>ひらがな>カタカナ>ア数記

サブタイトルについてもメインタイトルと同様に単純主効果の検定を行った。字種の各水準について、漢字は法学が 1 位で音楽が 8 位と、全体の傾向との違いが著しい。ひらがなは工業が 7 位と少ない。カタカナは文学が 3 位と多く医学が 8 位と少ない¹¹。分野の各水準について、音楽ではメインタイトルの場合と同じく漢字とひらがなとカタカナに有意差がない。また、文学と法学と経済と工業でひらがなとカタカナに有意差がない。

定分野で多いことは、除去すべき偶発的要因としてではなくむしろその分野の性格を反映するものとしてとらえるべきだ、という見方も一概には否定できまい。最後に、とりわけ、このようなやり方で標本を選別することはデータを恣意的に操作しているという批判を免れないと考える。

11 平均値から見ると文学は音楽に次いで 2 位であり医学は法学より上であるにもかかわらず、このように判定した理由は次の通りである。カタカナという水準における分野間の多重比較によると、工業は医学より有意に大きいと法学との間には有意差がない。また、文学は医学と法学のいずれとの間にも有意差がない。

表 5: 各分野における各字種の平均値及び標準偏差 (サブタイトル)

字種 分野	漢字	ひらがな	カタカナ	アルファ ベット	数字	記号	全長	<i>n</i>
音楽	5.31 (3.58)	5.30 (4.10)	4.25 (5.74)	1.64 (4.45)	0.34 (1.33)	0.92 (1.24)	17.77 (11.11)	119
文学	5.34 (2.81)	3.38 (2.84)	3.39 (4.21)	0.01 (0.11)	0.20 (0.66)	0.81 (1.36)	13.13 (6.33)	80
法学	8.62 (6.03)	1.91 (2.30)	1.83 (3.74)	0.30 (2.19)	0.24 (0.99)	0.72 (1.24)	13.57 (8.99)	86
経済	7.71 (4.87)	2.92 (2.83)	2.71 (4.82)	0.21 (1.07)	0.28 (0.95)	0.68 (1.32)	14.53 (8.25)	116
医学	7.29 (6.31)	4.69 (4.17)	1.88 (2.91)	0.51 (3.87)	0.24 (1.12)	0.89 (1.51)	15.50 (9.70)	203
動物	6.45 (5.07)	4.84 (4.69)	2.44 (4.53)	0.25 (2.57)	0.15 (0.69)	0.77 (1.56)	14.89 (9.13)	110
物理	7.07 (3.58)	3.85 (3.21)	1.97 (3.77)	0.34 (2.14)	0.09 (0.41)	0.56 (1.00)	13.88 (5.75)	68
工業	7.94 (6.43)	2.50 (3.09)	3.35 (4.90)	1.84 (7.67)	0.71 (2.76)	0.80 (1.50)	17.11 (11.78)	185
分野 平均	7.07 (5.41)	3.74 (3.75)	2.74 (4.45)	0.76 (4.34)	0.32 (1.51)	0.79 (1.39)	15.42 (9.68)	967

メインタイトルとサブタイトルを通してみた場合、分野別の長さはだいたい同じような序列になっている（もっとも、メインタイトルのほうが分野間の差が著しい）。また、字種別では漢字が最も多くア数記が最も少なく使われている。

次に、各分野のメインタイトルにおいて各言語構造が占める比率を表 6～7 に示す。

表 6: 各分野において各言語構造が占める比率 (メインタイトル)

分野 言語構造	音楽	文学	法学	経済	医学	動物	物理	工業	合計
名詞その他 (10)	97	35	59	87	178	74	64	185	779
	51.3%	23.0%	24.1%	32.2%	39.8%	33.2%	36.8%	48.4%	37.4%
名詞単独 (11)	29	52	100	97	137	47	52	119	633
	15.3%	34.2%	40.8%	35.9%	30.6%	21.1%	29.9%	31.2%	30.4%
名詞の名詞 (12)	32	32	44	50	44	53	34	36	325
	16.9%	21.1%	18.0%	18.5%	9.8%	23.8%	19.5%	9.4%	15.6%
名詞と名詞 (13)	3	4	31	11	15	4	6	8	82
	1.6%	2.6%	12.7%	4.1%	3.4%	1.8%	3.4%	2.1%	3.9%
述語類 (30~33)	8	14	6	16	48	24	13	12	141
	4.2%	9.2%	2.4%	5.9%	10.7%	10.8%	7.5%	3.1%	6.8%
その他 (0,7,14, 34~36)	20	15	5	9	25	21	5	22	122
	10.6%	9.9%	2.0%	3.3%	5.6%	9.4%	2.9%	5.8%	5.9%
合計	189	152	245	270	447	223	174	382	2082
	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%

表 7: 各分野において各言語構造が占める比率 (メインタイトル) 大分類

分野 言語構造	音楽	文学	法学	経済	医学	動物	物理	工業	合計
名詞類 (10~13)	161	123	234	245	374	178	156	348	1819
	85.2%	80.9%	95.5%	90.7%	83.7%	79.8%	89.7%	91.1%	87.4%
述語類 (30~33)	8	14	6	16	48	24	13	12	141
	4.2%	9.2%	2.4%	5.9%	10.7%	10.8%	7.5%	3.1%	6.8%
その他 (0,7,14,34~36)	20	15	5	9	25	21	5	22	122
	10.6%	9.9%	2.0%	3.3%	5.6%	9.4%	2.9%	5.8%	5.9%
合計	189	152	245	270	447	223	174	382	2082
	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%

以上の表における言語構造の分類の仕方について先に述べておく。まず、表 6 においては (後出の表 8 においても同様)、「名詞その他」に分類される標本が全体の 4 割近くあり、これが単独のカテゴリーであることを考えるとやや問題であるかもしれない。ただ、表 2 に関して述べたように、これをさらに下位カテゴリーに分けることは何を明らかにしたいのかについての考えがある程度ないとやりにくく、適当に細分類しても結局役に立たないものになってしまう恐れがある。このことは今後の課題としたい。

また、表 7 においては (後出の表 9 においても同様)、分類番号 14 と分類番号 34~36 は、それぞれ名詞類、述語類には含めずにどちらも「その他」の中を含めている。その理由は、まず名詞に格助詞などのついた分類番号 14 は名詞類に比較的性質が近いとはいえやはり統語的機能が異なるからであり、同様に分類番号 34~36 は原則として文を完結さ

せる機能を持たないという点でここで言う述語類と異なるからである。一方、分類番号 14 と分類番号 36 には格助詞などで終わるという類似点がある。そこで分類番号 14 と分類番号 34～36 を同類とし、純粋な名詞類や述語類から分離するほうが整合的であると判断した。

メインタイトルの構造は、まず度数の少ないカテゴリーをまとめた表 6 についてカイ 2 乗検定を行い、さらに名詞類 4 カテゴリーをまとめて一つにし、全体を 3 カテゴリーにした表 7 についてもカイ 2 乗検定を行った（具体的には *IBM SPSS Statistics Version 19* を用い、「記述統計」の「クロス集計表」を選んで実行した。後述するモダリティの分析に関しても同様である）。表 7 に関しては全体として名詞類が圧倒的に多くこの傾向は法学で著しい。表 6 を見ると、法学では中でも『法学入門』『社会正義』や『法と道徳』『日本社会と法律学』のように名詞単独や「名詞と名詞」の使用率が他分野より高く、このことがタイトルに硬いイメージを与えていると考えられる。「名詞の名詞」は『海の本』『動物のくらし』のように動物で多い。述語類は『細胞寿命を乗り越える』『薬が効かない!』や『海と親しもう』『動物は何をを考えているのか?』のように医学と動物で比較的多く使われる。

各分野のサブタイトルにおいて各言語構造が占める比率を表 8～9 に示す。

表 8: 各分野において各言語構造が占める比率（サブタイトル）

分野 言語構造	音楽	文学	法学	経済	医学	動物	物理	工業	合計
名詞その他 (10)	27 22.7%	31 38.8%	33 38.4%	49 42.2%	87 42.9%	48 43.6%	33 48.5%	58 31.4%	366 37.8%
名詞単独 (11)	4 3.4%	11 13.8%	16 18.6%	19 16.4%	28 13.8%	7 6.4%	6 8.8%	48 25.9%	139 14.4%
名詞の名詞 (12)	4 3.4%	9 11.3%	11 12.8%	11 9.5%	6 3.0%	14 12.7%	4 5.9%	5 2.7%	64 6.6%
名詞と名詞 (13)	2 1.7%	6 7.5%	3 3.5%	6 5.2%	9 4.4%	1 0.9%	4 5.9%	0 0.0%	31 3.2%
名詞 + 格助詞 (14)	5 4.2%	7 8.8%	4 4.7%	2 1.7%	13 6.4%	7 6.4%	10 14.7%	8 4.3%	56 5.8%
述語類 (30～33)	39 32.8%	12 15.0%	9 10.5%	15 12.9%	32 15.8%	11 10.0%	4 5.9%	24 13.0%	146 15.1%
その他 (0,7,34～36)	38 31.9%	4 5.0%	10 11.6%	14 12.1%	28 13.8%	22 20.0%	7 10.3%	42 22.7%	165 17.1%
合計	119 100%	80 100%	86 100%	116 100%	203 100%	110 100%	68 100%	185 100%	967 100%

表 9: 各分野において各言語構造が占める比率 (サブタイトル) 大分類

分野 言語構造	音楽	文学	法学	経済	医学	動物	物理	工業	合計
名詞類 (10~13)	37 31.1%	57 71.3%	63 73.3%	85 73.3%	130 64.0%	70 63.6%	47 69.1%	111 60.0%	600 62.0%
述語類 (30~33)	39 32.8%	12 15.0%	9 10.5%	15 12.9%	32 15.8%	11 10.0%	4 5.9%	24 13.0%	146 15.1%
その他 (0,7,14,34~36)	43 36.1%	11 13.8%	14 16.3%	16 13.8%	41 20.2%	29 26.4%	17 25.0%	50 27.0%	221 22.9%
合計	119 100%	80 100%	86 100%	116 100%	203 100%	110 100%	68 100%	185 100%	967 100%

サブタイトルの構造についても、ある程度カテゴリーをまとめた表 8 についてカイ 2 乗検定を行い、さらにメインタイトルと同様、全体を 3 カテゴリーにした表 9 についてもカイ 2 乗検定を行った。表 8 を見ると名詞単独は『超音波ハンドブック』『現代技術社会論』のように工業で非常に多く、「名詞の名詞」は動物と法学で多い。「名詞+格助詞」が物理で多いのは、『ニュートン力学から量子力学まで』のように物理学史に言及するタイトルが 4 個含まれていることが一因と考えられる。表 9 に関しては全体として名詞類が多く、中でも経済と法学で有意だが、音楽では『メロディーが歌になる』『音楽感覚と思考力を養う』のように述語類がかなり多く使われる。

最後に、各分野のメインタイトルにおいて各モダリティが占める比率を表 10 に示す。

表 10: 各分野において各モダリティが占める比率 (メインタイトル)

分野 モダリティ	音楽	文学	法学	経済	医学	動物	物理	工業	合計
勧誘・訴え・命令 (3,4,5)	20 83.3%	10 52.6%	1 10.0%	3 15.8%	26 41.3%	12 34.3%	5 33.3%	7 36.8%	84 41.2%
その他 (0,1,2)	4 16.7%	9 47.4%	9 90.0%	16 84.2%	37 58.7%	23 65.7%	10 66.7%	12 63.2%	120 58.8%
合計	24 100%	19 100%	10 100%	19 100%	63 100%	35 100%	15 100%	19 100%	204 100%

モダリティは度数が少ないので、有効な検定を行うためにカテゴリーをまとめ、全体を 2 カテゴリーにしたものについてカイ 2 乗検定を行った。メインタイトルについては「勧誘・訴え・命令 (3~5)」「働きかけ類」と「その他 (0~2)」に分けた時だけ有意差が出た。音楽で『誰でもぜったい楽譜が読める!』『ウケる!作曲入門』のように働きかけ類、特に訴えが多用される。

各分野のサブタイトルにおいて各モダリティが占める比率を表 11 に示す。

表 11: 各分野において各モダリティが占める比率 (サブタイトル)

分野 モダリティ	音楽	文学	法学	経済	医学	動物	物理	工業	合計
勧誘・訴え・命令 (3,4,5)	24	7	1	3	12	7	3	9	66
	40.7%	46.7%	9.1%	13.0%	26.1%	35.0%	33.3%	18.4%	28.4%
その他 (0,1,2)	35	8	10	20	34	13	6	40	166
	59.3%	53.3%	90.9%	87.0%	73.9%	65.0%	66.7%	81.6%	71.6%
合計	59	15	11	23	46	20	9	49	232
	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%

サブタイトルについてもメインタイトルと同様にカテゴリーを分けた時だけ有意差が出た。やはり音楽で『クラシック音楽をもっと楽しむ!』『どんなメロディも曲になる!』のように働きかけ類、特に訴えが多用される。メインタイトル、サブタイトルとも音楽で働きかけ類が多用される理由としては、鑑賞・実技・作曲など読者に可能な活動の範囲が広いことが考えられる。

以上、字種と言語構造とモダリティのそれぞれについて個別に考察してきたが、これらを総合して書名に表れた各分野の性格を浮かび上がらせることも分野によっては可能であろう。法学を例にとろう。法学ではメインタイトルもサブタイトルも短く漢字の使用率が高い。また、両者とも名詞類が有意に多く、メインタイトルでは名詞単独や「名詞と名詞」、サブタイトルでは「名詞の名詞」が有意に多い。これらの事実からは簡潔で硬いイメージの書名が想像されるが、それは一般の人々が法学という学問分野に抱くイメージに恐らくふさわしいものであろう。

3.1.2 ベストセラーの場合

各年代のメインタイトルの各字種の平均値及び標準偏差を表 12 に示す。なお、以下では 1973 年～1982 年を「旧年代」、2003 年～2012 年を「新年代」と呼ぶ。

表 12: ベストセラーの年代別の各字種の平均値及び標準偏差 (メインタイトル)

字種 年代	漢字	ひらがな	カタカナ	アルファ ベット	数字	記号	全長	<i>n</i>
新年代	3.19 (2.25)	2.41 (3.04)	1.76 (3.16)	0.11 (0.65)	0.10 (0.48)	0.27 (0.61)	7.83 (5.00)	200
旧年代	3.35 (1.95)	2.16 (2.48)	1.08 (2.23)	0.01 (0.14)	0.03 (0.24)	0.05 (0.21)	6.67 (2.98)	200
年代 平均	3.27 (2.10)	2.28 (2.77)	1.42 (2.75)	0.06 (0.47)	0.06 (0.38)	0.16 (0.47)		400

2 年代を被験者間要因とし、一般書の場合と同様に 4 字種を被験者内要因とする分散分析の結果、年代の主効果は $F(1,398)=7.89, p<.01$ 、字種の主効果は $F(2,32,921.65)=121.35, p<.001$ で有意である。字種と年代の交互作用は $F(2, 32, 921.65)=2.25, p<.10$ で有意傾向があるにとどまる。

メインタイトルは新年代のほうが長いだけではなく長短のばらつく度合いも大きい（等分散性の検定により 0.1% 水準で有意）。『告白』『手紙』のように短いものがある一方で『もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら』のように極端に長いものもあるということである。以上のことは、近年長いタイトルの本が増えているという報告（『朝日新聞』2007 年 7 月 5 日，2014 年 6 月 7 日）を裏付けるものである。なぜそうなったのかについてそれらの報告は諸説を紹介しているが、憶測の域を出ないと思われるので本稿では立ち入らずその考察は今後の課題としたい。

年代を平均した場合の字種別の長さについては次の序列がある：

漢字>ひらがな>カタカナ>ア数記

各年代のサブタイトルの各字種の平均値及び標準偏差を表 13 に示す。

表 13：ベストセラーの年代別の各字種の平均値及び標準偏差（サブタイトル）

字種 年代	漢字	ひらがな	カタカナ	アルファ ベット	数字	記号	全長	<i>n</i>
新年代	3.90 (2.88)	4.80 (3.25)	1.42 (2.72)	1.62 (4.52)	0.52 (1.00)	0.68 (1.38)	12.94 (5.25)	50
旧年代	5.41 (2.87)	4.22 (4.75)	0.74 (2.36)	0.04 (0.36)	0.41 (1.30)	0.26 (0.61)	11.07 (6.39)	69
年代 平均	4.77 (2.96)	4.46 (4.18)	1.03 (2.53)	0.71 (3.03)	0.45 (1.18)	0.44 (1.02)		119

字種の主効果は $F(2.68, 313.22) = 34.83, p < .001$ ，字種と年代の交互作用は $F(2.68, 313.22) = 5.67, p < .01$ で有意である。年代の主効果は $F(1, 117) = 2.87, p < .10$ で有意傾向があるにとどまる。

年代を平均した場合の字種別の長さについては次の序列がある：

漢字≡ひらがな>ア数記≡カタカナ

全長に有意な年代差はないが、漢字は旧年代のほうが有意に多くア数記は新年代のほうが有意に多い。欧米文化の影響の強まりなどの事情から見て、うなずける結果であろう。

言語構造については、メインタイトル、サブタイトルのいずれも年代差は有意ではない。各年代のメインタイトルにおいて各モダリティが占める比率を表 14 に示す。

モダリティはメインタイトルにだけ有意な年代差が出た。「陳述」「働きかけ類（3～5）」「その他（0，2）」に分けてカイ 2 乗検定を行った。旧年代は『アルキメデスは手を汚さない』『エーゲ海に捧ぐ』のように陳述が圧倒的に多かったのに対し、新年代は『さらば外務省！』『置かれた場所で咲きなさい』のように訴え・命令などが増えている。新年代のこの傾向には著者が読者との距離を縮めようとする意図がうかがえる。

表 14: 各年代において各モダリティが占める比率 (メインタイトル)

年代 モダリティ	新年代	旧年代	合計
陳述 (1)	13	20	33
	40.6%	74.1%	55.9%
勧誘・訴え・命令 (3,4,5)	12	2	14
	37.5%	7.4%	23.7%
その他 (0,2)	7	5	12
	21.9%	18.5%	20.3%
合計	32	27	59
	100%	100%	100%

3.2 個別表現—「わかる」と「なぜ」を例として—

第 1 節でふれたように、芸術作品のタイトルは時に商品としての名づけ (ネーミング) という性格を持つ。佐々木 (2001: 269) はさらに、なによりもまず商品であろうとする芸術作品にとって必要なのはよいネーミングであり、大量生産大量消費のもの、CD や書籍においてそれは顕著である、と述べている。そこで、本調査のデータの中から人目を引く語句を含み商品としての名づけという性格を持つと考えられるタイトルを抜き出して考察を試みたい。ベストセラーのタイトルの中には量的な分析に耐えられる表現は見当たらなかったため、一般書のタイトルから「わかる」と「なぜ」を取り上げることにする。

まず、一般書に関して、メインタイトル又はサブタイトルの少なくとも一方に「わかる」「分かる」「理解」及びそれらの活用形のどれか一つ以上を含む本数を分野別に示すと次のようになる¹²。

音楽 21; 文学 1; 法学 2; 経済 14; 医学 44; 動物 4; 物理 29; 工業 15

これらが分野ごとの標本の総数に占める割合に対しカイ 2 乗検定を行ったところ、音楽、医学、物理の 3 分野で有意に多い。その理由を考えると、まず物理では「相対性理論」「量子論」「数学」「統計」などといった言葉を含む書名の中で使われていることが非常に多く (25 冊)、数理的で難解なことがよくわかるように読める、ということを読者にアピールする意図がうかがえる。このことはかなりの程度音楽にもあてはまり、やはり「楽譜」「楽典」「理論」「コード」「音階」などといった言葉と共起していることが非常に多い (17 冊)。一方、医学では事情が異なる。数理的なことを暗示しているのは『理学療法をはじめて学ぶ学生のためのわかりやすい力学のはなし』など数冊に過ぎず、その他は大きく二つの傾向が見出される。一つは体の仕組みなどを図解するものであり、もう一つは日常的な心身の (異常) 現象にかかわるものである。それぞれ例を挙げる¹³。

12 「わかる」「分かる」に加えて「理解」を取り上げたのは、同義語として問題がないと考えたからである。この点「知る」などは、高い知能や知的労働などの含意を必ずしも持たないので以下の考察にはふさわしくないと考え、検索語に含めなかった。

13 以下でいう図解系と日常系を併せて上記の医学 44 冊のうち約 25 冊を占める (内訳はほぼ半々)。その中には『図解入門よくわかる最新「病」の予防と治療』のように、どちらの性質も兼ね備えた例もある。

図解系:『完全図解わかる!からだのしくみ事典』『絵でわかる!脳っておもしろい2』『カラー図解見てわかる生化学』『すべてわかる人体解剖図』『わかっちゃ図解ウイルス』

日常系:『よくわかる病気のしくみ』『からだを蝕むウイルスのすべてがわかる本』『違いのわかる医薬品の重大な副作用』『人工内耳から分かったその理由^{サブ¹}』『科学でわかる男と女の心と脳^{メイン²}』『脳の不思議がわかれば女性関係は 99% うまくいく^{メイン³}』

日常系についてさらに考えよう。その際、次のことが参考になる。それは、医学では「なぜ」「どうして」「(内容補足的連体修飾節)わけ」を書名のどこかに含む本の割合が他の分野に比べて多いことである^{14, 15}。この条件に該当するタイトルの例を挙げる。

『なぜ、体はひとりでに治るのか?』『なぜ、「がん」になるのか? その予防学教えます。』『どうして子供は勉強しないといけないの^{メイン¹}』『男はなぜ若い子が好きか? 女はなぜ金持ちが好きか? ^{サブ²}』『女はなぜ、男に突然キレるのか!? ^{サブ³}』『4 つの凄い視覚能力があるわけ』

これらの多くは読者が抱くであろう素朴な疑問を代弁するような形になっている。しかも、そのうち上付き数字のついた 3 個は上掲の「わかる」を含むメインタイトルまたはサブタイトルの上付き数字のついたものと組み合わせて使われている(『どうして子供は勉強しないといけないの^{メイン¹}: 人工内耳から分かったその理由^{サブ¹}』のように)。このように、医学の書名で「わかる」が多く使われる理由の一つは、読者の素朴な疑問に答える形で、その本を読めば病気にもならず人間関係もうまくいき健康で幸福な人生を送ることができる、というメッセージを伝えるためであると考えられる。

以上、同じく「わかる」という表現を書名に用いてはいても、その意図が分野によってさまざまであることを示そうと試みた。

4. おわりに

本稿では、書名の表現形式に関して、学問分野による違いがあるか、またベストセラーについては年代による違いがあるかに特に焦点を当てて考察した。データ全体を通じて字種では漢字が多く使われるといった結果を含め、およそその傾向が明らかになったのではないと思われるが、本の判型による違いがあるか、サブタイトルの有無はいかなる要因に左右されるか、などの問題には全く触れることができなかった。また、データの収集や分析の方法に関しても改善の余地があろう。これらを今後の課題としつつ、本稿が書名研

14 「なぜ」「どうして」と並んで「(内容補足的連体修飾節)わけ」を取り上げた理由としては、それが前の二つとはほぼ同義と見ることができることのほかに、有効なカイ 2 乗検定を行う上で必要な標本数を確保することがある。なお、「(内容補足的連体修飾節)理由」「(内容補足的連体修飾節)原因」に該当する例は一般書のデータの中にはない。また、「内容補足的」という用語は寺村(1993: 197)による。

15 該当する標本の数は、音楽 1、動物 4、経済 6、医学 13、その他の分野 0、である。標本数が少ないので、医学(447 中 13)と他の分野(1635 中 11)の 2 カテゴリーでカイ 2 乗検定を行ったところ、医学は有意に多い。

究のさらなる発展のきっかけとなることを期待したい。

文献

- 窪蘭晴夫（2008）『ネーミングの言語学—ハリー・ポッターからドラゴンボールまで—』
開拓社
- 佐々木健一（2001）『タイトルの魔力』中央公論新社
- 白川博之（2009）『「言いさし文」の研究』くろしお出版
- 寺村秀夫（1993）『寺村秀夫論文集Ⅰ—日本語文法編—』くろしお出版
- 仁田義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 益岡隆志・仁田義雄・郡司隆男・金水敏（1997）『文法』（岩波講座 言語の科学 5）岩波書店
- もり・きよし（1995）『日本十進分類法』日本図書館協会
- 森岡健二・山口仲美（1985）『命名の言語学—ネーミングの諸相—』東海大学出版会
- 孫琿琿（2011）「当当自营畅销书书名研究」『现代语文（语言研究）』第 12 期，现代语文雜誌社
- 赵晶（2010）「畅销书书名解析—研学课题“解析畅销书书名”研究成果—」『经纶教研 新课改』第 29 期，经纶教研
- 牟艳艳（2010）「畅销书书名的语言学研究」『现代语文（语言研究版）』第 6 期，现代语文雜誌社

データ出典

国立国会図書館サーチ (<http://iss.ndl.go.jp/>)
『出版年鑑』（1973～1982）（2003～2012）出版ニュース社

付記

本稿は、埼玉大学大学院生であった第二著者毛が筆頭著者山中の指導の下に作成した修士論文、及びデータの一部の再検定の結果に基づいて、山中が文章を書き、毛が表を作ったものである。ただし、3.2 節に関しては、分析と文章化の全てを山中が単独で行った。データの統計的処理などに関して助言を賜った埼玉大学教養学部の高木英至教授にお礼申し上げる。

また本稿は、日本語学会 2014 年度春季大会（早稲田大学）で口頭発表した内容に加筆修正したものである。会場にて貴重な御意見を下さった方々に感謝する。なお、本稿の初稿に対しては査読者の方々から多くの有益なコメントをいただいた。厚く御礼申し上げる。

（2014 年 10 月 14 受付，2014 年 12 月 4 日再受付）

Report

Linguistics on Book Titles:
Based on *National Diet Library Search*

YAMANAKA Nobuhiko (Saitama University)

MAO Aitao (Waseda Juku)

Abstract:

This paper analyzes data on the titles of Japanese books, gathered by means of *National Diet Library Search*. The books fall into two categories: ordinary books and bestsellers. As for the former, 2082 samples have been taken from eight areas in *Nippon Decimal Classification* for the years from 2003 through 2012. As for the latter, 400 titles have been obtained for the years from 1973 through 1982 and from 2003 through 2012. The objects and methods of analysis are common to both categories: we have separated main titles and subtitles, and for each of them we have examined the frequencies of several kinds of characters used, the linguistic structures of the titles, and the modalities in the titles. Further, we have considered the effects of the areas on the statistics regarding ordinary books and those of the periods on the statistics regarding bestsellers.

Of statistical significance are the following: as for ordinary books, there are effects of the areas on the length of titles, the frequencies of the kinds of characters used, the linguistic structures of the titles, and the modalities in the titles, both for main titles and subtitles. As for bestsellers, there are effects of the periods on the length of titles and the modalities in the titles for main titles, and those on the frequencies of the kinds of characters used for subtitles.

Lastly, taking *wakaru* as an example, we argue that different areas may have different reasons for using a particular expression as part of a book title.

Keywords: title of a book, naming, bestseller, main title, subtitle, kinds of characters, linguistic structure, modality, ANOVA, chi-square test.